

週刊 武四郎

第4号

2018年(平成30年)5月2日(水)
発行・松阪市

●毎月第一週は、
松浦武四郎の人となりについてご紹介します

監修・松浦武四郎記念館

「唐、天竺まで……」

武四郎さんの旅の人生は、十六歳の時に家出したことから始まりました。自伝には、「天保四年二月朔日 独家を出て江戸に到り……」

と唐突に書かれているので、のちの伝記などには、「旅への思いやみがたく家出して江戸へ向かったのだった」などと書かれているのですが、真相はちょっと違っていたようです(日記とか自伝って、都合の悪いことは書かないでもんね)。

武四郎さんの場合は、お兄さんの日記が残っているのですが、実際には何があったのか、ばっちりわかっちゃっています。

武四郎少年は、なぜか学問の師匠であった津の平松齋斎先生の大事な火事頭巾を道具屋に売ってしまったのでした(火事頭巾というのは、防寒頭巾のこと)。

と。事件が発覚して、齋斎先生から呼び出しを喰らった日のお兄さんの日記によると……

「二月二日 七ツ半頃二津ヨリ書状持参り、武四郎二何事も悪キ事いたし無かと尋候、何事も無と申候」

今でもよくある光景です。

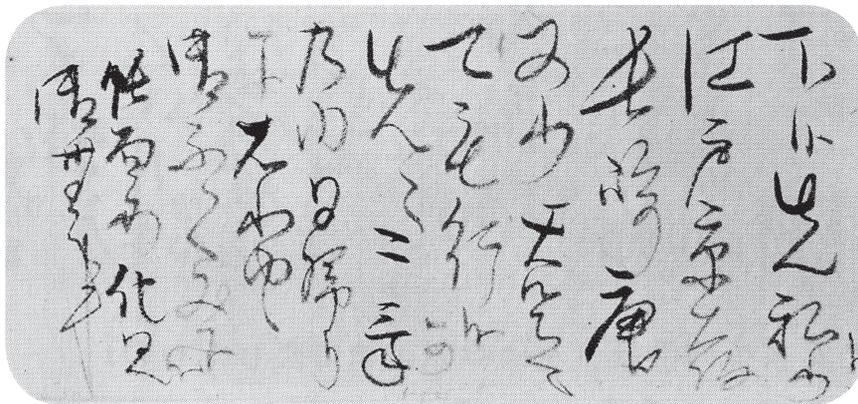
「おまえ、何かやったのか?」「……ううん(个実はやってる)」

事の次第にお兄さんが驚愕して戻ってきたところ、すでに武四郎少年の姿はなく、家中大騒ぎに。……どこ行ったんだ?

バレルのは時間の問題と想っていた武四郎少年は着々と家出の準備をしていました。こっそり家から掛け軸などを持ち出して家出資金にあてていたのです。一族郎党近隣の人々が心配しているところに、置き手紙が見つかります。

「私わ江戸、京、大坂、長崎、唐または天竺へでも行き候か」
ええっ? 唐(中国)または天竺(インド)って……? 家族はどんなに驚いたことでしょうか。その頃、武四郎少年は一路江戸へと向かっていました。

この最初の家出は一ヶ月ほどであえなく連れ戻されましたが、短い江戸滞在中に武四郎さんは象刻の技術を身につけ、これがのちの長い旅暮らしを支える経済的基盤になります。当時の十六歳って今ならば高校一年生……いやはや恐るべき行動力です。



▲唐、天竺へ行くかもしれないと武四郎が書いた手紙 (松浦武四郎記念館蔵)

松浦武四郎 (1818 ~ 1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

